

〈書評と紹介〉 近藤潤三著 『ドイツ移民問題
の現代史 : 移民国への道程』

MORI, Hiromasa / 森, 廣正

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

668

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

2014-06-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010286>

書 評 と 紹 介

近藤潤三著

『ドイツ移民問題の現代史』

——移民国への道程』

評者：森 廣正

本書は、長年にわたってドイツにおける外国人問題の研究に携わってこられた著者が、新たな歴史的視座から従来の研究業績を精査し、再構成してまとめられたものである。このことは、書名ならびに副題からも想起することができる。本書は、以下の内容で構成されている。

序章 移民国ドイツへの接近―「外国人」と「移民」に即して

第1部 歴史の中の移民問題―第二次世界大戦
終結まで

第1部のあらまし

第1章 移民問題の歴史的輪郭

第2章 移民流出国から労働輸入国へ―第
二次世界大戦終結まで

第3章 ロシア帝国・ソ連の独系人―アオ
スジードラーの系譜

第2部 戦後ドイツの移民問題―ドイツ統一ま
で

第2部のあらまし

第4章 第三帝国の崩壊と避難民・被追放
民

第5章 ドイツ分断とユーバージードラー

第6章 外国人労働者の戦後史―外国人労
働者から外国人へ

第7章 東ドイツ（DDR）の外国人労働者

第8章 ソ連とポーランドの独系人―アオ
スジードラーの流入

終章 移民国を展望して

以下、本書の内容を紹介することにしよう。

序章では、ドイツの移民問題を考察する際に何故歴史的視点からの分析が必要とされるかを論じ、本書の範囲と構成を紹介している。その前提には、ドイツは2004年の移民法の成立によって移民国に変貌したこと、移民国に到達するまでには長い道程があったという歴史認識がある。すなわち、自国民を移民として送り出す大きな人の移動があったという歴史的事実を回避して、国内への流入面だけで移民問題を考察することは、「重大な視野狭窄」を招き、新たに注目されている国外移住の側面を欠落する危険性があるとする。本書の範囲は、1990年までの移民問題の現代史であり、第1部は第三帝国崩壊までの移民の送り出しと受け入れの歴史、第2部は東部領土の喪失と東西ドイツの分断とともに生じた第2次世界大戦後の個別移民集団の考察である。

第1部は、3つの章で構成される。第1章では、ヨーロッパの中央に位置するドイツ領土の歴史的な変遷を辿り、移民問題におけるドイツの特徴は人の移動と国境の移動が交錯していること、さらに人の移動は戦争の結果生じてきたことを明らかにする。第2次世界大戦後のドイツへの移民には、外国人労働者をはじめ、東部領土やその他の地域からの膨大な数の避難民や被追放民、東欧諸国やソ連から帰還するドイツ

系住民であるアオスジードラー、さらに東ドイツから西ドイツへ移動したユーバージードラーを含めることができるという見解が示される。この見解は、2006年に連邦統計局が「移民の背景を有する人々」という新たな分類を用いて人口構成を示したことに依拠している。

第2章では、近代ドイツにおける人の移動が考察される。17世紀のドイツは移民流入国であるとともに流出国であったが、18世紀にはロシアと東欧へ流出する移民が拡大した。19世紀のドイツは「移民の世紀」といえるほどアメリカなどへの移民の主要な送り出し国のひとつであった。さらに、19世紀末から20世紀の転換期にドイツが労働輸入国へ転換したプロセスと実態が考察される。ヴァイマル期に整備された外国人管理体制やナチス期の外国人労働者政策は、外国人の定住を阻止するものであり、当時のドイツは移民受入れ国ではなかったと指摘する。

第3章は、現在のドイツの移民の一部を構成するアオスジードラーの系譜をロシア帝国・ソ連地域に限定して取り上げる。その理由は、1987年以降のアオスジードラーの大半を占めているのがソ連出身の独系人だからである。18・19世紀に本格的に展開したロシア帝国へのドイツ人の移民は、数々の特権を付与された農民層としての入植であった。1914年には、ロシアに定住した独系人は約170万人であった。だが、ロシア社会の変遷の中で様々な特権は廃止され、ロシア化政策が推進されていった。さらに第1次世界大戦の勃発とその後の情勢が、ロシア在住の独系人にもたらした破局ともいえる悲惨な事態が明らかにされる。

第2部は、1990年のドイツ統一までの戦後ドイツの移民問題を考察した5つの章で構成される。第4章の対象は、第2次世界大戦末期から敗戦直後の時期に生じたドイツ人の避難民と

被追放民の大規模な移住問題である。避難民は、ソ連軍の東プロイセンへの侵攻とともに生じ、東部地域ではソ連軍の略奪や暴行から逃れようとするドイツ人住民の長蛇の列が生じた。他方、もう一つの悲劇として東部領土やチェコ、その他の東欧諸国からの膨大な数の被追放民の存在がある。避難民・被追放民の正確な数の把握は困難であるが、1950年までに東西ドイツに流入した人は1,173万人であった。これらの人々が、戦後復興と経済成長の初期段階における労働力の不足を解消し、戦後ドイツ経済の繁栄に大きく貢献したことが明らかにされる。

第5章では、1950年を境として避難民・被追放民にかわって西ドイツへの人口流入の中心的位置を占めることになった東ドイツから西ドイツに移住するユーバージードラーが考察される。戦後冷戦体制の中でのドイツの東西への分断は、膨大な数のユーバージードラーを生み出した。その動きを、東ドイツ（DDR）建国からベルリンの壁建設までの前期と壁建設から崩壊までの後期に分けて考察している。1949年から1989年までのユーバージードラーの総数は約400万人に達したが、その多くは前期に集中していた。1961年のベルリンの壁は、放置すれば国家の存在を脅かすほどの人の流出を防止し、国を守る防護壁として建設された。1989年11月のベルリンの壁の崩壊によって、東ドイツ（DDR）国家の消滅は必至となったことが明らかにされる。

第6章は、戦後ドイツの外国人労働者問題を大きくふたつの時期、すなわち1955年の募集開始から73年の募集停止までの第1期と1973年から90年のドイツ統一までの第2期にわけて考察する。外国人労働者の実態と政策の流れの分析から、第1期のローテーション原則のもとでの外国人労働者政策は、経済的視点に立脚しており長期的な展望が欠けていたとする。第

2期の政策も、長期的展望が欠落した場当たりの政策のままに終わったとする。導入された外国人労働者の滞在が長期化し、定住化して外国人となり、さらに移民へと変貌していった現実と政策との乖離の拡大が明らかにされる。

第7章では、東ドイツ（DDR）における外国人労働者政策の推移と実態を考察し、それが西ドイツの外国人労働者の受け入れと大同小異であったことが明らかにされる。東ドイツで外国人労働者が導入されたのは、1960/70年代からで、当初は中・東欧諸国からの受け入れであったが、1980年代以降にアジア・アフリカ諸国へとシフトしていった。二国間協定にもとづく受け入れは、東ドイツが必要とする労働力対策であり、移民を受け入れない社会主義国を維持するためにローテーション原則が最後まで維持された。受け入れた外国人労働者を集合住宅で生活させる社会的隔離政策の結果、一般市民との交流は断たれ、物不足の原因は外国人の消費行動によるといった反感すら生ずる結果となった。

第8章では、1990年前後のドイツに奔流となって流入した集団のアオスジードラーと呼ばれる人々がソ連とポーランドから大量に出現するまでの経緯が考察される。アオスジードラーの前史とされる第3章と深くつながる章である。独ソ戦開始後、ソ連に在住していたドイツ系住民が次々とシベリアや中央アジア地域などへ強制移住させられた具体的な経緯が明らかにされる。戦後も、彼らに対する社会的差別や隔離政策がとられ、ドイツ語のできない人が広範に形成されるなどのロシア化が進んだ。1960年代以降には、ドイツに帰還する動きが高まった。ポーランドの状況はさらに苛酷で、ドイツ系住民の存在は公的に否認され、民族を抑圧する強権的なポーランド化政策の中での無権利状態の生活を強いられた。1970年から1990年までに、多くのドイツ系住民が西ドイツに流出した。

終章では、ドイツ移民史を時期区分し、それぞれの時期に生じた主な移民集団についてまとめている。移民問題は、各国の歴史の展開と切り離すことはできず、日本も同様であることが強調される。1990年のドイツ統一は、ドイツを移民国へと変貌させたが、移民国への転換過程の考察、多文化主義の是非と並行社会の危険性など、新たに提起されている課題に取り組む必要性が指摘される。

以上が、意図された内容から逸脱する危険性を顧みずにまとめた本書の紹介である。いくつかの感想などを記すことにしよう。

本書が対象とする東ドイツから移住するユバージードラーや東欧やソ連から帰還するアオスジードラーの流入は、1990年前後のドイツを揺るがす大きな出来事であった。本書の特徴のひとつは、移民送り出し国であったドイツの歴史的経緯に注目して、これほど膨大な数のドイツ系の人々が移住し、帰還してくる原因と背景を明らかにしている点である。もうひとつは、従来、その存在は知られていても、ほとんど明らかにされてこなかった東ドイツ（DDR）の外国人労働者についてひとつの章を設定して考察している点である。そこでは、統一後のドイツで生じた外国人に対する暴力事件、たとえば難民収容施設への放火事件などが東ドイツ地域で大きかったことの背景が明らかにされている。

本書では、日本の外国人労働者問題にも少し触れているが、場当たりの外国人労働者政策を克服するためには、移民国へ転換することがひとつの方向であると説いているように思われる。なお、巻末に「参照した文献一覧」（欧文・和文）が掲載されている。

（近藤潤三著『ドイツ移民問題の現代史—移民国への道程』木鐸社、2013年7月、256頁、定価3,000円＋税）

（もり・ひろまさ 法政大学名誉教授）